

扉の向こうへ

第2部 苦悩する親たち

「シンイチが学校に行つて、実母の5人暮らし。保険会社で人身事故を担当している。ほんと、旦那同行しなくてもいいよ。」

妻が思ひ詠んだ表情で「にした言葉に、峠東地域に住むヒロシ(53)は耳を疑つた。15年前のことを。」ソノイチは長

た事で足を動かして放心状態の男性。6歳の女の子を亡くした親は、常軌を逸して

男で小学校生。真休みが終わったばかりで、何の問題もなく楽しく通学していると思つていた。

「これから」と妻に聞かれて、少し間を置いて「1学期から」との答えが返ってきた。心当たりはないという。困惑しながら、「そのうそ行くだろ」とつぶやいて話を切り上げた。

その後、ヒロシは7年になつて長男のひきもりは闇扱つていいことになる。家族の関係に亀裂が入り、長男とつかみ合いになつたことも、苦悩の日々の始まりだった。

二四〇

狂い始めた歯車



ヒロシの自宅に残る穴の開いたドア。ひきこもりだった長男と、つかみ合いになってしまった時にできた

この連載へのご意見や感想をお寄せください。記事で紹介させていただくことがあります。郵便番号400-8515、甲府市北口2の6の10、山梨日日新聞社編集局「扉の向こうへ」取材班（ファックス055-231・3161、電子メールkikaku@sant-nichi.co.jp）。

なぜ…埋まらない答え

「学校で、トイレに関する話題で東京競馬場に向かってたかが、途中で『お父さん、トイレ行きたい。帰りたい』と言いい出した。家でなければ嫌な気がする」と、甲府行きのバスに乗り換えるしかなかつた。

取り乱した。無理難題を押しつけてくる相手に、正論で立ち向かわなければならぬこともあった。

事故の当事者の都合が最優先のため、勤務時間は不規則になる。子どもが登校する前に家を出て、夜に帰宅すると倒れるように眠った。朝起きて新聞を開き、交通事故の記述の問題から逃げていたのか

事がないと、ほつとした。不登校になつた息子を、ビロシは「甘つちよい」とは思ひなかつた。「なぜ」「どうして」との疑問がめぐる。ただそれも家にいる時だけで、職場に行けば頭の中は顧客のことであつぱいになつた。いま考えると、多忙を理由に家に留めていた。どうしていかつか分からぬ、やるせぬさ紛らわせているのか。壁に

山梨発ひきこもりを考える

10

爪で引っかいたような跡が、日に日に増えていった。

ここでいじめられたとか、何があるのだろうか。ヒロシはトラウマ（心的外傷）を疑つたが、理由は聞けずまい

「が過ぎてい
くよりもによ
く狂い始め
た。」と笑つた言葉が
向けられたが、第2部は、
「わが子のひきこもりによつて

に、時間だけが過ぎて、息子のひざくもりによく、家族の歎車も狂い始

つい
め
厳しい
厳しく、その父母には「甘や
かしている」と尖った言葉が
向けられがちだ。第2部は、
わが子のひきこもりによつて

魔の向こうへ

山梨発ひきこもりを考える 11

ある日、ヒロシ(53)は岐
東地域在住IIは自宅の外で
妻と話しながら、二。今ま

第2部 苦悩する親たち(2)

ていつた。特に妻と、同居する実母との関係は悪くな

妻との間に長女ヒシンイチが生まれた。長男夫婦と一緒に姫二太郎の孫との同居は、母にとって「周りがうらやむような暮らし」だったに違いない。

近所には生徒会長になつた子や、熱心に家の手伝いをする子がいた。ひきともつたことで孫の成長を周囲に自慢できない母は、みじめに感じていたのだろう。このあることに、祖先を親に向けた。「あんたんどうの

育て方が悪いから、こんな
んなつちもうだよ。ヒロ
シがたしなめても收まらな
い。妻はずっと、うつむい
ていた。

家から出ようとしない長男、その親をなじる母、病んでいく妻一。ヒロシは、家族を続けるのはもう無理だ

あなたの育て方が悪い

らなし、近くの踏切で警報音が鳴り始めると、突き動い下りつづらへ走る

かざれるように妻が突然
「私なんか」と金切り声を
上げて遮断機の方へ駆けだ
した。

ヒロシはどうさに妻の腕をつかみ、羽交い締めにして、2人の前を列車が猛スピードで通り過ぎていく。騒ぎに気付いた近所の人たちに、ヒロシは妻を抱きかかえながら「何でもありますせん。大丈夫ですから」と引きつった笑みを浮かべた。長男のひきこもりによつて、家族に「ひび」が入つ

責め一身に負った妻

ヒロシの父親は3歳の時に病死し、母は女手一つでヒロシと弟を育てた。勤め先から帰ると野良着に着替え、決まって暗くなるまで畑仕事。「周りがうらやましきよつな暮らしをしたい」が口癖で、「一生懸命頑張れし」と子どもにも努力を求めた。

母のおかげで何の不自由もなく進学でき、就職も結婚もどんどん拍子だった。



長男がひきこもっていた部屋。ドアの向こうには、かつて家族の団らんの場だった食卓がある

ヒロシが帰宅しても、食事の用意がない日が増える。た。医師に「うつ病」と診断され、妻は入退院を繰り返すようになっていく。母と一時別居したり、自宅を2世帯住宅にリフォームしたりしたが、改善の兆しは見られない。何度も自分の退院で家に帰ってきた時、妻が小さく言った。「お母さんの気配がする。だって、

限り、家族や地域のしがらみから逃れることはできな
い。妻の病の悪化を防ぐには、離婚するしかないと決
めていた。

主婦の妻は、こもつてゐる息子の身を案じ、母から責められ、身動きが取れなくなつていつた。

いた。長い沈黙が続いた後、
口を開いた。「お父さんは、
お母さんをこの家から解放
してあげたい」。妻、そし
て「母の隠し持つ金

育て方が悪いから、こんな
んなつちもうだよ」。ヒロ
シがたしなめても收まらな
い。妻はずっと、うつむい
ていた。

「おいがするもの」。その目に光はなかつた。

ヒロシに息子を責める気持ちはないかった。この状況を少しでも良くしたい。ただ、それだけを願っていた。2003年、ヒロシは離婚届を提出した。(文中仮名)

掲載日:2014年10月28日 / 1面 / 紙面真001
紙面・記事・写真・イラスト等の無断掲載・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社

扉の向こうへ

第2部 苦悩する親たち ③

けんかのきっかけは、ヒロシ(33)＝峠東地域在住＝が、ひきこもっている長男のシンイチに向けた一言だつた。「学校に行かないなら、仕事を見つけなさい」

妻と離婚後、長女は東京の大学に進学し、老いた母とシンイチとの3人暮らしになつた。息子は高校に進んだものの、数日通つただけで中退。部屋にこもり、インターネットの世界に没入している。

18歳になり、同級生は進学、就職と進路を決める大切な時期を迎えた。母親が不在のいま、息子を導く責任は自分にある。そんな父親としての焦りが、命令調の言葉として口を突いた。

「それができれば、とつぐにそうしている」。激高した息子と、胸ぐらをつかんでの取つ組み合いになつた。男2人の体が家のドアや壁にぶつかるたび、大き

な音が響く。自室にこもつた息子は号泣し、とりなそうとする父親に罵声を浴びせた。

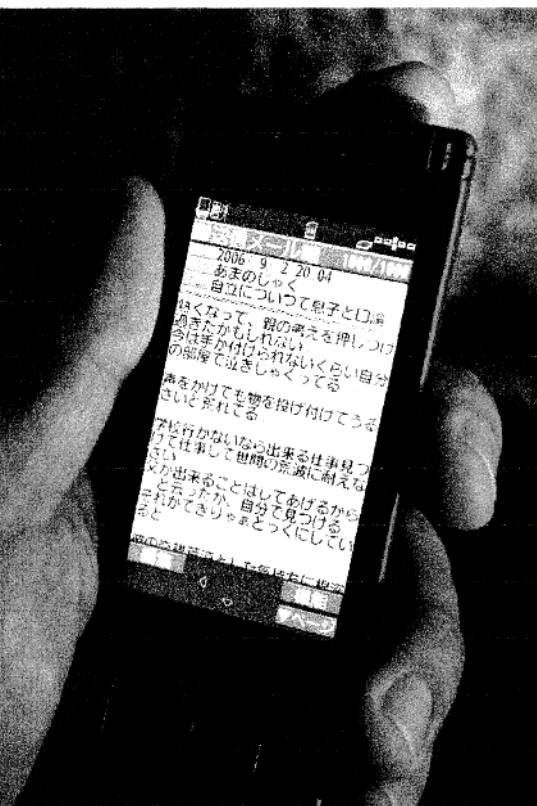
この一件はヒロシを大きく落ち込ませた。あの素直

ある時、「変わらなければいけないのは、俺の方なんじゃないか」との思いが浮かんだ。強引に引っ張り出しても逆効果なだけ。他人に追い付けと叱咤するの

く落ち込ませた。あの素直に、親の変化を感じ取つた。息子の心境に変化をもたらす「何か」を欲してい

く。親の変化を感じ取つたのか、シンイチからニュー

ー。いつか息子と語らいな



息子と取つ組み合いのけんかの後、ヒロシが友人に送った携帯電話のメール。いまも保存している

価値観変えて見守ろう

に、転機は突然、やつて来た。「お姉ちゃんのところに行こうかな」。息子の言葉に耳を疑つた。7年もひつてもつっていた人間が、姉と一緒とはいえ東京で暮らせるわけがない。すぐに戻つてくるだろうと思いつつ、ヒロシは姉弟が住める新しいアパートを借りた。

父親の予想に反し、息子が戻つてくることはなかつた。アルバイトを始め、そのうち1人暮らしをするよ

スや異性の話題を持ち掛けることも出てきた。

「やりたいこと、ほしい

ものがあつたら言いなさい」。望みがあれば、漫画でも手伝うと言つたのに。

「父親線」をやめてから気持ちがだいぶ整になつた。威厳ある振る舞いをしてから、これまでの手配していなかった。首都圏の書店に勤めている。

息子と向き合つた日々が、いまは遠い。「なぜ、うちの子が」との問い合わせもあり。認めたくなかったのだろう。「そのうち良くなる」と信じ込み、思い通りにならないと「働きなさい」と怒りの感情に支配された。その延長線上で、わが子がどうしていいか分からず、一人で苦しんでいたことを知つた。親の価値観や都合を押しつけてはいけない。無条件で受け入れよう。いくつもの葛藤を越えた

どり着いた境地だ。

麻の向こうへ

第2部 苦悩する親たち(4)

「世間」のもの

「すよね、ひき」もござい
るだけで、犯罪者予備軍み
たいに見られる。普通じゃ
ないつて烙印を押されれ
9月に甲府市内で開かれ

すよね。ひきこもっていいだけ、犯罪者予備軍みに見られる。普通じやつて、烙印を押されり」といふ。9月に甲府市内で開かれ

2年になる。

資格を取り、生かせる職場で仕事に励んでいた娘。思いやりがあり、意欲的な態度は上司からの評価も高かつた。「あの日」までは。

前の晩のうちに次の日の支度を済ませておくのは、子どものころからの習慣だった。いつもの場所に置かれた仕事用のかばん。その日も持つて出掛けるのだと

相談できない、頼れない

ひき」もりの子は社会との接点を持たず、世間に「何をしているか分からぬ存在」だと思われている。時に周囲に不安を与え、「何をしてかすか」とあらぬ臆測を呼ぶことさえある。そう考へてゐるサユリは、いま自分の子が偏見の目で見

られる対象かと思うと、悔しくて、悲しくてたまらない。娘(33)がひきこもって、

思っていた。

「行くんでしょ?」。サ
ユリはなかなか起きてこない娘に声を掛けた。返事が
ない。部屋から出てくる気

配もない。何が起きたのか。密な地域にある。くしゃみ。突然訪れた「異変」を、どうすれば、「風邪をひいたらしい」とうわざが回る。理解すればいいか分からなかつた。

自宅は近所付き合いが濃い。監視されているようだ。サユリが嫁いできたころ

子育てに一生懸命だったのは同じはず。だが、子が独立した妹と、ひきこもりの子を抱えた自分。思つてもみなかつた「育て方が

うか。出口の見えない暗いトンネルの中で、サユリはいま、懸命に頑っている。どんなに小さくてもいい。光がほしい。（文中仮名）



ひきこもりの子を持つ親が集う場で、ため込んだ思いをぶつけたサユリ。「もう誰も頼らない」と思っていたが、同じ悩みを持つ母親は震えるサユリの肩に手を当て、なだめてくれた

が差した。
感じた土地柄に何度も嫌気が
怖い。娘が仕事に行かず、
ひきこもっていることが知
れ渡れば、どんなことを
われるか分からぬ。家の
外では何事もないような顔
をして過す。身を守るよ
うに、全身を鎧で覆つて
いるようだ。

悪い」という肉親からの評価に、これまで積み重ねてきた人生が全否定された気がした。子どもは親の通知表なのか。

悪い」という肉親からの評価に、これまで積み重ねてきた人生が全否定された気がした。子どもは親の通知表なのか。

娘の部屋のこちら側で、
洗濯をし、食事を用意する
毎日。ドア1枚隔てた向こ
う側では、時間が止まつて
いるように思える。娘だけ
が、世の中から取り残され
てしまつてゐる気がする。
言葉も、視線も交わさな

思い悩んだ末、サユリは一度だけ妹に相談した。返ってきたのは非難の言葉。「お姉ちゃんが、そういう育て方をしたからだよ」同じ娘を持つ母親同士、

娘の部屋のこちら側で、
洗濯をし、食事を用意する
毎日。ドア1枚隔てた向こ
う側では、時間が止まつて
いるように思える。娘だけ
が、世の中から取り残され
てしまつてゐる気がする。
言葉も、視線も交わさな

扉の向こへ

第2部 苦悩する親たち

2年前、ちょうど今ころ
だった記憶している。峠
中地域に住むトモコ(58)は
出掛けた先で神社を訪れ、
24歳の次男の将来を祈願し
た。わが子は、夏の初めか
らひきこもりがちになつて
いた。

不安の日々「お守り」頼み

トモコは次男が中学生のころに離婚し、働きながら3年離れた兄弟を育た。2人とも家を出たが、弟の方は2年前の春、大学を中退して戻ってきた。「せっかく入学できたのに」と困惑したが、仕事を終えて2人分の晩ご飯を用意する日々に喜びも感じていた。次男が2階の自室にひきこ

A black and white photograph showing a collection of traditional Japanese decorative items. In the foreground, a large red rectangular envelope (hisho) lies diagonally, featuring a gold-colored circular seal in its center. Behind it, a smaller white rectangular box also has a similar gold seal. Several pieces of decorative paper or washi tape are scattered around; one piece features a repeating pattern of small circles, while others show stylized floral or leaf motifs. The items are arranged on a dark, reflective surface.

家族にも相談できないトモコは、各地の神社から持ち帰ったお守りに息子の回復を祈っている

その後、子はどうなる

知り合いには知られたくない。

どうになつた。
何がきっかけは分から
ないが、一方的に遮断され
た親子の会話も少しずつ増
えている。トモコはうれし
く感じながらも、不安は消
えてはいない。お守りへの
祈りは、いまも続いている。

どうしたらしいのか。誰かに相談したい。でも、9歳を過ぎた親に心配は掛けられない。県外にいて、飲食店の店長としてほとんど休みのない生活を送っている長男には、「甘えているだけだろ」と一蹴されるのが目に見えている。親戚や知り合いには知られたくない。

子はどうなつてしまふのだろう。社会から孤立し、家の中で埋もれていってしまうのか。そう考えると胸が苦しくなる。

今年に入り、変化の兆しが見えた。次男が、自分で見つけてきた「ひき」もり当事者の集い」に足を運ぶようになった。

何がきっかけは分から

つた。ドアが開く方向に重い「障害物」が置かれていた。わずかな隙間から、ピリピリと張り詰めた空気を感じた。理由は分からなかったが、「近寄るな」というサインだ。その場から逃げるよう、誓約を下した。

毎日、「あの子の状態が良くなりますように」と心の中で祈った。

文
中
假
名

扉の向こうへ

第2部 苦惱する親たち ⑥

中3の長男が自分の母校を受験したいと言つてきた時のこと、峠中地域に住むミドリ(55)ははつきり覚えている。どんな仕事に就き、どんな家庭を築くのだろう。想像するだけで幸せだった。

だが、息子は希望の高校に入学後、すぐに学校に行きたがらなくなつた。クラスでのいじめが理由だった。

息子には「部活はやめてもいいよ」「学校には卒業に必要な日数だけ行けばいいから」と言い、退学しないで済むよう促した。目の前の困難から逃げ出さなかつたという経験は、きっと糧になる。夫とそう考えていた。

ある日、いつになつても学校から帰つてこない。辺

りを探し回り、河原にいるところを見つけた。「何やつていたの」。詰問口調になつたミドリは、わが子から思つてもみない言葉を浴びせられた。「死んだ方がましだ」

いきなり頬を張られた気がした。2年前の夏のことだ。その後、息子は通信制高校に移り、専門学校に進んだが、再び通えなくなつた。

「仲間」が教えてくれた



はき出せる場所がありがたい。わが子を見守る気持ちを強く持てる。ミドリは親の会に参加して、そう感じている

きだ」とことを知った。うちの子はミニバイクでなら外出できる。ひきこもりと呼んでもいいのかちゅうちょしたが、ミドリは行こうと決めた。先が見えない現状を少しでも変える手掛かりがほしい。

親の会では参加者が輪になり境遇を語り合つた。「会話が増えた」という家庭をうらやましく感じ、「5年も部屋から出てこない」と

つらくなるだけ。どうしたらいいのか分からず、ただつづ「うちはましな方」と立ち尽くしている。そんな安堵した。初対面の人ばかり直せなかつた。なぜと問だが、同じ境遇にいない友人には話しても、「大変ね」今年8月、ひきこもりの方が間違つていた」と自責と同情されるだけで余計に子を持つ親の会が山梨にで

めることで回復したり、進の念に転化した。

学校を機に再スタートした家庭の外に相談相手を求める。わが子だけがうまくやめようとしたこともある。立ち尽くしている。そんな

感情は、いつしか「育て人が間違つていた」と自責つらくなるだけ。どうしたらいいのか分からず、ただつづ「うちはましな方」と立ち尽くしている。そんな安堵した。初対面の人ばかり直せなかつた。なぜと問だが、同じ境遇にいない友人には話しても、「大変ね」今年8月、ひきこもりの方が間違つていた」と自責と同情されるだけで余計に子を持つ親の会が山梨にで

つてわが身のことを打ち明けた。「周りには元の生活に戻れた子もいるのに」と続けた時、うなずきながら聞いていた1人の女性が口を開いた。「他人と比べると、苦しくなるよね」

胸を突かれた。人並みか劣っているか、それだけの物差しで見ていた。比べるから、足りていないと焦燥感が生じる。親がすべきことは、無一の存在であるわが子を見守ること。不安だらうけれど、信じて見守り続けること。自分のように悩み苦しんだ「仲間」が教えてくれた。

最近、「ご飯は」など必要な会話しかしなかつた息子が、「東京に行きたい」と話掛けってきた。回復の兆しかどうかは分からぬい。だけど、日々の小さな変化がたまらなくうれしい。どう接していくべきか、次の親の会で聞いてみよう。ミドリは安心して寄りかかる「場所」を見つけた。

(文中仮名)

